

グローバル社会と“世界市民”

平 林 孝 裕

「世界市民」との表現をもって関西学院の一つの精神・理想が示されています。これと同様の表現で「グローバル市民」「地球市民」もあります。これらの表現の意味の差異が明瞭でなければ、本学の在り方を示す言葉として用いるには慎重であるべきでしょう。周知のように「世界市民」との言葉は、パウルリバー教会にあるランバス宣教師の記念碑から採られました。この言葉とともに、日本のみならず広く四大陸で活躍したランバスの生涯が想起されます。まさに世界的な活動です。しかし地理的な広がりだけが、「世界」との言葉に込められた意味なのでしょうか。ランバスを送り出した米国南メソジスト監督教会はその起源をジョン・ウェスレーにさかのぼることができます。ウェスレーは、「世界はわが教区なり」(I look upon all the world as my parish)という有名な一句を日誌に記しました。世界は教区、つまり自分の仕事場、責任のある場所という認識です。ランバスの働きが世界規模となったのも、この言葉と同じ責任感があったからではないか。こう考えると「世界市民たれ」との標語は、そのような責任への誘いに思えてならないのです。

(国際学部宗教主事)

ペスタロッチと信仰

土 井 健 司

建学の精神をひろく考えると、他者に仕えることだといえます。これまで他者に仕えた人は数え切れないほどいるわけですが、ペスタロッチもその一人です。

ペスタロッチは19世紀前後に活躍したスイスの教育者です。若いときに著した『隠者の夕暮れ』はかれの教育における信念などがつづられた小著です。ノイホーフでの事業が失敗したときにもなお彼は教育への情熱を失わず、そのマニフェストと言うべきものを書いたのです。

そのなかでかれが強調するのが人間の子心ということです。たとえば啓蒙期の思想家として人間の平等を説きますが、ペスタロッチは「子である」ということにすべて

の人間の共通性を認めました。つまり誰もがかつては「子ども」であった。子どもでなかった人はいないのです。そして子どものときに得た親にたいする信頼感、その究極が神への信仰に他ならないといえます。

ペスタロッチは貧しい家の子ども、親を失った子どもをとくにかわいがり、親のように接したといえます。たとえば『シュタンツ便り』にはその様子がありのままに記されています。子どもであるという安心感、親への信頼感を満足に得ることができない子どもに自ら親のように接してその子心を涵養しようとしたといえます。今の時代、こうしたペスタロッチにわれわれが学ぶものも多いと思います。

(神学部長)

関学で、人間を磨こう

村 瀬 義 史

関学が、キリスト教学やチャペルなどキリスト教に接する機会を大切にしているのは、とりもなおさず、本気で世界市民を育もうとする姿勢の現れである、と私は思う。

学則が言う「キリスト教主義に基づく人格の陶冶」とは多義的だが、通底していることはおそらく、知識や技術の面だけでなく、学生の人間としての成長そのものに関心を持っているということだろう。だからこそキャンパスの雰囲気は、ロボットを造る工場のようなよりも人が育まれる牧場のようであり、学生の自主性の発揮を歓迎する文化があり、そして「何を身につけるか」ということだけでなく、「どういう人間になるか」ということを問いかけ、考えさせる“しかけ”が、学内に様々な形で設けられているのだ。多くの学生にとっては「異文化」であるキリスト教との出会いもその一つである。

学生時代に、時代や国境を越えて世界に広がるキリスト教と向き合うことは実に貴重である。それは決して、特定の考え方に染まるためではない。世界的なもの・普遍的なものとの対話の中で、あなた自身の内に、あなた固有の、しかも世界で通用するような価値観や生き方を創造するためなのだ。あたたかい小さな村のような一面をもつ神戸三田キャンパスは、ヒューマンな出会いと成長の可能性に満ちている。関学で、人間を磨こう。せつかく、関学に入学したのだから。

(総合政策学部宗教主事)